

学 位 論 文 要 旨	
氏 名	吉田 朋弘
題 目	テンジクダイ科スカシテンジクダイ属とその近縁属の分類学的研究および本科魚類の高次分類群の形態学的再検討 (Taxonomic revision of the cardinalfish genera <i>Rhabdamia</i> and <i>Verulux</i> , and the morphological definition of Indo-Pacific genera in the family Apogonidae)
<p>テンジクダイ科スカシテンジクダイ属 (<i>Rhabdamia</i>) は、インド・西太平洋に広く分布する小型魚類である。近年、<i>Rhabdamia</i> スカシテンジクダイ属は、<i>Rhabdamia</i> スカシテンジクダイ属と <i>Verulux</i> クロスジスカシテンジクダイ属に分類されたが、これまで両属の包括的な分類学的研究は行われておらず、既存の資料では同定ができない個体も多数見つかっており、分類学的にひじょうに混乱していた。また、両属の形態学的定義が曖昧であるため、帰属させるべき属が不明な <i>Rhabdamia gracilis</i> スカシテンジクダイに酷似した未記載種も多数得られていた。</p> <p>そこで本研究では、スカシテンジクダイ属とクロスジスカシテンジクダイ属の両属の分類学的研究とインド・太平洋における本科魚類の各属の再定義・再検討を行った。分類学的研究では、両属に2属6種を認めた。<i>Rhabdamia</i> Weber, 1915 スカシテンジクダイ属：<i>R. gracilis</i> (Bleeker, 1856), <i>R. nigrimentum</i> (Smith, 1961), <i>R. novaluna</i> Yoshida, Mabuchi and Motomura, 2018, および <i>R. spilota</i> Allen and Kuitert, 1994. <i>Verulux</i> Fraser, 1972 クロスジスカシテンジクダイ属：<i>V. cypselurus</i> (Weber, 1909) と <i>V. solmaculata</i> Yoshida and Motomura, 2016. なお、分類学的研究を遂行する過程で、体色等がスカシテンジクダイに酷似し、同所的に生息するスジイシモチ属1種の標本が多数得られた。本種を <i>Ostorhinchus yamato</i> Yoshida, Hayashi and Motomura, 2018 として新種記載するとともに、スカシテンジクダイとの詳細な比較検討を行った。</p> <p>テンジクダイ科魚類の高次分類群の系統類縁関係については、精度の高い分子解析 (Mabuchi et al., 2014) によって明らかになりつつあるが、各属の詳細な形態学的な検討は不十分であると言われていた。そこで、本研究ではインド・太平洋に分布する本科魚類37属を外部形態、下尾骨を中心とした内部形態、および文献 (特に <i>Ozichthys</i> と <i>Zapogon</i>) に基づき再定義した。その結果、既知の37属の他に、これまで <i>Apogon</i> の新参異名とされていた <i>Asperapogon</i> Smith, 1961 ハナイシモチ属 (仮称) の有効性が明らかになり、さらに2新属 <i>Flammapogon</i> リュウキュウイシモチ属 (仮称) と <i>Yaeyamapogon</i> ミヤコイシモチ属 (仮称) の設立が妥当であることが分かった。</p> <p>テンジクダイ科魚類において下尾骨の形態は属の特徴として有効な形質であるものの、系統類縁関係を示さないことが明らかになった。一方、魚類では一般的に生態や生息環境に直結する形態は系統を反映しないと考えられているが、分子系統樹、形態学的特徴、および生態を包括的に比較検討したところ、本科魚類では色彩や歯、体形、感覚器などの生態や生息環境に適応した形態が系統を反映する傾向にあることが明らかになった。これはつまり、本科魚類では生態や生息環境が近似する分類群同士の系統的な位置が近いことを意味すると考えられる。</p>	